

遊びは非認知能力を育む

—自発的な遊びが非認知能力を育む②—

園長 山崎立哉

11月号で、非認知能力を伸ばすには、子どもが自ら好んで楽しんで行う自発的な遊びということをお伝えし室内遊びの例を紹介しました。

次は戸外遊びです。子どもたちは戸外遊びが大好きで毎日戸外で思い思いに遊んでいます。1、2歳児さんは、毎朝9時過ぎから10時頃まで戸外遊びを楽しんでいます。特に2歳児すずめ組の子どもたちは、砂場遊びやブランコ、三輪車等に乗ってとても元気に遊んでいます。園庭の奥にある複合遊具は、1、2歳児さんにはまだ登ることが出来ず遊ぶことが出来ません。しかし、2歳児のすずめ組さんは、複合遊具の滑り台を逆から上がる「逆のぼり」をして上まで登って喜んですべり台を滑っています。すべり台を逆から上がる「逆のぼり」は、あまり推奨される遊び方ではありませんが、ダメというルールがあるわけでもありません。逆のぼりの方が運動になるし、上から滑ろうとする人とぶつからないように交渉する能力を育てることにもなります。

すべり台の逆のぼりは、子ども自身が遊びの中で「本当にダメだっけ？」と考える良い機会となります。ある遊びがダメだとしても、ほかの遊びややり方に、子どもが自分の気持ちを切り替えることができる練習になります。「怖いから」「先生に怒られるから」やらないのではなく、納得して気持ちを切り替えられる。大事なことは自己決定する。気持ちを切り替えながら自分で決めていくことの繰り返しが大事だということです。

このように、子ども自身が自己決定して工夫しながら遊ぶことが、少しずつ非認知能力を育てていくことになるのです。

もし自由に遊ぶ機会がなく乳幼児期から学校的な教育を先取りして、大人から与えられた課程に取り組むことが子どもの1日の大半を占めると、自分自身で考えることがなくなり子どもたちは指示待ち型となっていきます。その繰り返して、結果や大人の評価を否が応でも意識させられます。それによって子どもの中から生まれてくる好奇心や探究心、あるいは仲間への思いやりの気持ちを抑えてしまうことにつながっていく可能性があります。乳幼児の時期は、子どもが自分のしたいことを自由にできる時間を是非確保したいものです。